

フィリピン大学交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部
国際言語文化学科 3年 英米文化コース

交換留学生としてフィリピン大学で過ごした日々は、毎日が新しい出来事の繰り返しで、フィリピン空港到着後の大渋滞から始まり、すべて外国語で行われる授業、他国からの留学生との寮での共同生活、路上で冷却なしで大量に計り売られる魚など、日本での生活では決して経験、目にすることのできない様々な体験に囲まれたとてつもなく内容の濃い留学生活であった。ここではそれらの中からいくつかを抜粋し紹介したいと思う。

まず、授業についてであるが、自らが選択した授業の中で特に印象的であったものは、東南アジア諸国の文化について、学外での授業やフィールドワークを豊富に取り入れながら考察する **Southeast Asia 30** である。授業は複数の教授によるオムニバス形式で行われ、授業毎に様々な分野の教授が招かれるため、毎回の授業はとても刺激的であった。加えて、グループ発表やマニラ市内の歴史的建造物へのグループ旅行など、現地学生と協力し取り組む課題も多く含まれていたため、授業が終わったのちも共に外出したり、授業外でもタガログ語を教えてくれる大切な友人を手に入れる貴重な機会を与えてくれた。

健康な生活を送り、授業に出席するための拠点となっていた大学内に新設された寮(**Acacia Residence Hall**)はただの生活の拠点としてだけではなく、各国から集まった留学生や現地学生との交流の場であった。カンボジアなどの東南アジア諸国をはじめ、大韓民国、オーストリア、スウェーデンなど多彩な国々から集まった学生が、得手不得手を問わず英語でコミュニケーションを取り合い、互いの考えについて理解し合えたことは、自らの留学生生活をより充実させるための大きな助けとなったと強く感じている。さらに、寮は個室ではなく国籍を問わない 3 人一部屋の共同生活であったため、朝起きてから夜寝るまで、ルームメイトと英語で会話し意思の疎通を図ることが必要で、語学力の向上を図るには

最適な環境であった。

授業のない休日は、現地の学生と共に魚やフルーツ、野菜を扱うウエットマーケットと呼ばれる大規模なマーケットを訪れ、ランブータンやマンゴー、目の前でたたき割られるココナッツジュースなど東南アジア特有のフルーツを楽しみ、大量に並べられた色とりどりの魚や、店先で行われる丸ごと一頭のヤギの解体を見学するなど刺激的な休日を過ごせた。

しかしながら、フィリピンでの留学生活の中で体験したことは楽しい事だけではなく、現地で生活しなければ気づくことのできないような発展途上国としての切実かつ悲惨な貧富の差を目の当たりにした。一例として、富裕層向けの大きなモールへと続く歩道橋の隅に座り込んで道行く人々に手を伸ばしお金を求める幼い兄弟や、5人ほどのグループで行動し自らで作ったジャスミンの花輪を売り、生活の足しにしながら道端で生活する少女のグループなど、文章にしてしまっただけではその悲惨さを的確に表すことが難しいものも多く、日本で何の不自由もなく暮らしている自分の日常がどれほど幸せなものなのかという現実を思い知らされた。

以上のことを踏まえて全体をまとめると、フィリピン大学で交換留学生として過ごした約4か月間は授業内外を問わず、現地の友人の助けを借りながら自らの留学の目的である語学学習に集中的に取り組み、充実した一日一日を過ごした大変内容の濃いものであった。加えて、現地での生活を通じ、発展途上国としてのフィリピンの本質的な一面にも触れられたことで、日本に生まれ平和に生活している自らの幸運に気づくこともできた。

まだまだ書き足りないが、このような貴重な機会を与えてくれたフィリピン大学と県立大学の交換留学協定と、その発展に携わっているすべての方々に感謝し、今後さらに両大学の交流が盛んに行われることを期待したい。